

## インフラツーリズムの魅力に関する基礎的研究

## A Basic Study on the Appeal of Infrastructure Tourism

○久松賢生<sup>1</sup>, 阿部貴弘<sup>2</sup>Kensei Hisamatsu<sup>1</sup>, Takahiro Abe<sup>2</sup>

Abstract: In this study, in order to obtain the knowledge that will contribute toward the sustainable urban development through the infrastructure tourism, 70 cases of infrastructure tourism has been analyzed. As a result, the charm and challenges of the current infrastructure tourism has been revealed.

## 1. はじめに

現在, 日本では, ニューツーリズムの一つとして, インフラを観光対象とするインフラツーリズムへの関心が高まっている<sup>[1],[2]</sup>. たとえば国土交通省では, 「インフラツーリズム PORTAL SITE」を開設し, その推進を支援している.

こうしたインフラツーリズムは, インフラへの理解や土木分野への理解を深めることはもとより, 日々の生活を支える身近なインフラを観光対象とすることで, 生活の場であるまちに対する理解を深め, ひいては持続的なまちづくりへの展開も期待することができる.

一方, 世界遺産観光に象徴されるように, 歴史資源を観光対象としたヘリテージツーリズムへの関心も高まっている. インフラの一つである土木遺産を例にとると, 土木学会が認定する選奨土木遺産を中心として, 観光やまちづくりへの活用が模索されている. こうした土木遺産は, インフラツーリズムとヘリテージツーリズムの双方の魅力を兼ね備えた観光対象といえよう.

こうした背景を踏まえ, 本研究では, インフラツーリズムを通じた持続的なまちづくりへの展開に資する知見を得るため, ヘリテージツーリズムの要素も加味しながら, 事例分析に基づき, インフラツーリズムの魅力を明らかにすることを目的とする.

## 2. 研究対象

本研究では, 2016 年 8 月 31 日時点で国土交通省のインフラツーリズムのポータルサイトに紹介されている民間主催ツアー及び, 全国の国土交通省地方整備局が提供するインフラツーリズムの紹介パネルを分析対象として, インフラツーリズムの魅力を明らかにする. 加えて, 土木学会選奨土木遺産を対象として, 選

奨土木遺産の観光対象としての活用状況を把握するとともに, その魅力を明らかにする.

## 3. 研究方法

## (1) インフラツーリズムの魅力の分析

国土交通省のポータルサイトを元に, 17 の民間主催ツアー及び 53 枚の紹介パネルを分析対象として, 各ツアーが売りにしているインフラツーリズムの魅力を抽出し, 類型化する.

## (2) 施設の種別・魅力別で分析

(1) の結果を元に, 対象施設とその魅力の関係性, 魅力同士の相互関係について分析を行う.

## (3) インフラツーリズムに係るヘリテージツーリズムの魅力の分析

土木学会選奨土木遺産の管理者に対して, 観光対象としての土木遺産の活用状況に関するアンケート調査を行い, 調査結果を踏まえてヘリテージツーリズムの魅力を抽出・類型化する. そのうえで, (1), (2) より得られた結果を踏まえ, インフラツーリズムの魅力とまちづくりへの展開について考察する.

## 4. 調査結果

本稿では, 研究方法 (1), (2) に関する調査結果を示す.

## (1) 魅力の分類

17 の民間主催ツアー及び 53 枚の紹介パネルから, 各事例が売りにしているインフラツーリズムの魅力を抽出・類型化すると, **Figure 1** に示す 18 の魅力に類型化することができた.

各ツアーの観光対象であるインフラは大規模な施設が多いことなどから, 日常的で触れる機会が少なく,

1 : 日大理工・学部・まち 2 : 日大理工・教員・まち

そうした施設に触れること自体楽しさの魅力があるが、さらに普段は入ることができないダムや橋梁の主塔など、ツアーだからこそ見学できる事を魅力とする事例が多い。

一方、工事現場の見学に関しては、期間限定で今しか見ることができないということを魅力にしている事例が多いが、工事期間中にしか見学できないため、持続可能な観光対象であるとは言い難い。

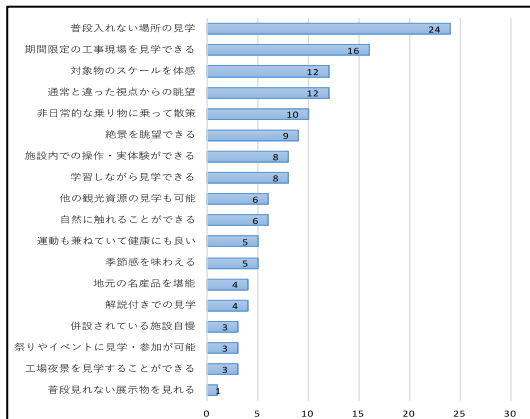


Figure 1. Type of fascination

(2) 魅力同士の相互性

Figure 1 で挙げた魅力同士の相互関係については、普段入れないことを魅力とする事例では、施設内の操作体験や学習しながら見学できるという魅力もセットにしていることが多い。

一方、非日常的な乗り物に乗っての散策を魅力としている事例では、水陸両用車に乗ってダム湖からの景色や、クルーザーで海上から港湾を眺められることから、通常と違った視点からの眺望との組み合わせがほとんどであった。

また、自然があることを魅力としている事例では、ウォーキング大会、ハイキングなどの運動ができることも魅力としている事例が多い。

(3) 施設と魅力の関係性

Figure 2 の通り、インフラツーリズムの対象として最も多いのはダムであった。ダムを観光対象としたツアーの魅力进行分类してみると、他の施設と比較して魅力のタイプが多いことがわかった。ダムのツアーには操作室やポンプ室といった普段入れないところを魅力としているのに加え、ダム湖からの自然や絶景、ダム堤体のスケールの大きさなど多くの魅力が付加されている。

一方、その他の対象施設で「砂防と学習」、「橋梁と絶景」、「道路と工事現場」といったように「対象施設と魅力」が一対一対応となっている事例が多い。

また、橋梁に関しては、ほとんどが“橋梁から”の景色を魅力としていることが多く、道路施設が工事現

場を見せているのと同様、構造物自体の景観や本来の機能を魅力としているところは数少なかった。

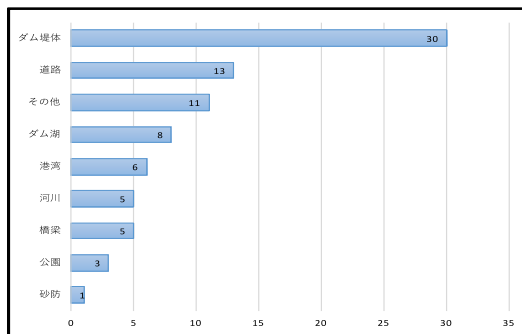


Figure 2. Type of facilities

5. まとめ

本稿では、国土交通省のホームページを元に、日本のインフラツーリズムの魅力抽出・類型化するとともに、魅力の相互性や施設別の魅力との関係性を明らかにした。その結果、分析対象としたインフラツーリズムにおいては、規模の大きいインフラ施設を対象として、非日常的な体験が大きな魅力となっていることがわかった。また、魅力同士の相互性においては、ある程度のパターンでの組み合わせがあることがわかったが、こうした魅力の相互関係は、持続的な観光にむけて重要であると考えられる。

また、施設と魅力の関係性では、ダムは魅力が幅広く、さらにダムごとに違った魅力を味わえるということに特徴があることがわかった。一方、その他の対象物では、定式化した魅力付けが多いことがわかった。

6. 今後の課題

今回の結果より、現在行われているインフラツーリズムの多くは、構造物単体を観光対象とするものが多く、周辺地域との関係における魅力付けを行っている事例は限られており、まちづくりへの波及効果を見出すことはできなかった。今後、土木遺産を対象としたヘリテージツーリズムの分析を踏まえ、魅力の類型を精査するとともに、まちづくりへの展開について考察していく。

7. 参考文献

[1] 国土交通省観光庁編:平成 26 年版 観光白書, p87, 昭和情報プロセス, 2014  
 [2] 国土交通省観光庁編:平成 27 年版 観光白書, p97, p139, 日経印刷, 2015

他